

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-10

## 中央ユーラシアの南北交渉：ホラズムの立場

松田, 知彬

---

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

66

(開始ページ / Start Page)

21

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

1988-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005479>

## 中央ユーラシアの南北交渉

——ホラズムの立場——

松田 知 彬

### 1

ユーラシアの中央は大乾燥地帯の主要部をなし、砂漠とステップが一面に広がる。そこでは、オアシスの農耕生活とステップの遊牧生活が基本となり、鮮かな対照を見せていた。大別すれば、天山山脈とシル・ダリヤを結ぶ一線を目安として、北側は遊牧民の活動の舞台であり、南側はオアシス民が歴史の担い手となっていた地域である。しかも両者それぞれに、ユーラシアの東西を連ねる大動脈が築かれていた。ステップ・ルートとオアシス・ルートがそれにはかならない。

これら二つのルートが、南方の海上に航跡を描くマリネ・ルートとともに、商品交換はもとより、それにとまら文化交際の面で大きな作用を果たしたことはいうまでもない。そればかりか、軍事力や政治力がその上を走り、民族の移動もそれに沿っていた。なにぶんにも、ユーラシアは複雑多様である。風土も、それに基づく生活様式も、むろん歴史相も。それだけに三つのルートは、相異なる生活者の間を結び、各々の歴史の動きを関連づける軸線としての意義をもつ。すなわち、ユーラシア史の軸線であり、ひいては前近代の世界史の軸線と認めてよからう。

それならば、三つのルートの作用を東西間の問題、つまり文字通りの東西交渉史の問題としてのみ取上げるのは、明らかに片手落ちである。實際上、三つのルートは支線によって互いにかみ合い、時代により軽重の差を示しながら消長してきた。しかも、そのからみ合いのうちに、いくつかの南北の軸が時として歴史の表面に浮かび出る。そうした軸を通じての南北交渉は、東西交渉と同様に古くから起り、目立たないながらもずっと続いていたにちがいない。ただ諸般の事情で記録に残りにくかったまでであ

る。とかく副次的なものと思なされがちな南北交渉が、かえって東西交渉の活力源であり、かつまた消長のカギを握っていたのではあるまいか。

このような南北交渉の軸線の一つが、西トルキスタンでオアシス・ルートと交差していた。西に向かってバミールを越えたオアシス・ルートは、アラル海に注ぐ双子川アム・ダリヤとシル・ダリヤの流域に入る。そこにはソグディアナ（ザラフシャン川流域）、バクトリア（アム・ダリヤ中流域）、ホラズム（アム・ダリヤ下流域）などのオアシス群が古くから栄えていた。とりわけバクトリアはインドに至る南方路の分岐点にあたり、同時に北方との交渉線が結びつく十字路を占めていた。

バクトリアとインドとの活発な交渉、およびその道筋は論をまたない。それに比べ、バクトリアと北方との交渉については再考を要する。とくにその交渉線がどこに向かい、ステップ・ルートとどのように連絡していたか、という肝要な点がどうもつかみにくい。オアシス・ルートとは異なり、ステップ・ルートを明確に表示するのは難しい。それにも一因がある。しかし、なによりもまずホラズムの在り方に注意すべきだろう。そこで以下に、ホラズムの歴史的立場に着目しつつ、南北交渉の軸線の一つについて考察してみたい。

## 2

ここでホラズム（Khorazm）と呼ぶ国土は、標準的な名称もスペルもない。Khorazm のほかに、Khorezm, Chorezm, Choresmia, Khwarezm, Khwarizm, Khwaresm などかしばしば用いられる。中国の史書には、貨利習弥伽（『大唐西域記』）、火尋（『新唐書』、『旧唐書』）、花刺子模（『元史』）と見える。いずれにせよ、アラル海に注ぐアム・ダリヤの下流域を指し、現在はソ連邦ウズベク共和国に属す。

長い間ホラズムは、バクトリアやソグディアナの陰に身を潜めていたかのようである。それが、イスラム勢力の中央アジア進出とともに、一躍歴史の脚光を浴びることになった。イスラム軍がアム・ダリヤを越えたのは、671年。ついで、ウマイヤ朝の将軍 Qutaybah ibn-Muslim が進撃を再開、705～715年に Māwarā' al-Nahr（アム・ダリヤの彼岸の地）の平定をなし遂げた。ホラズムが占領されたのもこの時である。さらに751年、名高いタラス河畔の戦いで、アッパース朝治下のイスラム軍が唐朝の軍を破るに及んで、西トルキスタンにおけるイスラムの覇権が確立した。クタ

イバの活動と並行して、将軍 al-Qāsim が西北インドの征服に着手していたから、ここにパミールとインダス川を結ぶイスラム世界の東境が形成されたわけである。

西方に目を転ずれば、東方と同じくウマイヤ朝のもとで再び高まりを見せた征服の波は、北アフリカを西に進み、7世紀末にモロッコに達する。ついで711年にはベルベル系の将軍 Tāriq ibn Ziyād の率いるイスラム軍がジブラルタル海峡を渡り、イベリア半島攻略を開始した。数年のうちに西ゴート王国を倒してピレネー山脈以南のイベリアがイスラムの領域と化す。シリアやエジプトの諸港市を基地とする海軍の活動により、地中海の島々もつぎつぎにイスラムの掌中に帰してゆく。こうして8世紀の半ばまでに、西はピレネーから東はパミールに及ぶ広大な地域がすっかりイスラム色に塗り変えられてしまった。エジプトやイラクからイスラム商船がインド洋にも乗り出していたので、東西の軸線は二つながらにイスラム勢力の牛耳るところとなる。

しかしながら、北方の遊牧世界には力が及ばず、ステップ・ルートおよび北からそれに結びつく交渉線は、イスラムの勢力圏外にとどまった。そのうえ、東ローマ帝国が行く手に立ちはだかっていた。なるほどこの帝国は、地中海貿易の要衝であるシリアとエジプトを失ったものの、小アジアの防衛に成功し、黒海貿易に主力を注ぎつつ立ち直る。「ワリヤギからギリシアへの道」、すなわち黒海～バルト海ルートを軸としてスラヴ民族との交渉が深まった。9世紀におけるロシア国家の起源はこの事実に求められよう。黒海の北岸から東に向かうステップ・ルートは、帝国にとって東方貿易の生命線となった。もっともこのルートは、すでに6世紀に東ローマと西突厥との間の絹取引に利用されたことがある。7～9世紀には、遊牧民 Khazār の国がステップ・ルートの要衝ヴォルガ河口部に拠って、東ローマと友好関係を保ちながら栄えていた。

このような状況の中で、ホラズムがイスラム世界と北ないし北西方面との交渉の基地として重きをなしたのは当然だろう。10世紀のアラブ系の地理学者 al-Muqaddāsi の書に見えるホラズムへの輸入品の一覧表は、それを端的に示す。

「黒貂、ミニヴァー、アーミン、野狐、貂、狐、ビーヴァー、斑の野兎、山羊などの毛皮、また蠟、矢、白樺の樹皮、毛皮の高帽子、にべ、魚齒、海狸香、琥珀、馬の鞣皮、蜂蜜、ヘーゼル・ナッツ、鷹、剣、甲冑、樺材、ス

ラヴ人奴隸，羊，牛。これらはすべてBulghārより来る。」とある(1)。

ブルガールはフン族の西進にともなって黒海北岸のステップに移動したトルコ系遊牧民。7世紀半ばにハザール族が強大化すると、二手に分れて再び移動しはじめた。その一派はドナウ川流域に入り、ブルガリア国の祖となる。他の一派はヴォルガ川を遡ってカマ川との合流点あたりに国を建てた。ムカッダーシーのいうブルガールは後者を指し、一般にヴォルガ・ブルガールと称する。その首都ブルガール市は、現在のソ連邦タタール自治共和国、クイビシェフ区のボルガリ村を占めていた(2)。

ブルガールからホラズムへ輸入された多種多様な商品の大部分は、むしろブルガール自体の産物ではない。それにしても、ブルガールからヴォルガ川を下だつて河口部のハザールへ、さらにそこからカスピ海の北東岸を回ってホラズムに至る商品の流れは明瞭だ。また、それらの商品はホラズムからイスラム世界の各地に転送されてゆく。当時ホラズムには Ürgench (イスラム地理書の Gurganj, Jurjāniya, 現在の Köhne Ürgench), Kāth Khiva などの諸都市が並び立っていた。とりわけ、アム・ダリヤ左岸に位置するウルゲンチは「トルキスタンの門」と称され、大市場となって栄えた。

10世紀のイスラム地理学者 al-Isṭakhuri によれば、「グルガンジュから南はフラサーンへ、西はハザールの国へと隊商が旅立つ。」という(3)。

ホラズムとブルガールとの中間を占めるハザールの国は、前述のように東ローマとの親密な関係を保っていた。したがって、カスピ海の北岸を東西にのびるルートにより、東ローマとイスラム世界の東部が結ばれていたことになる。ハザールは両者の仲立ちを務めたばかりでなく、ブルガールからヴォルガ川を下る商品を東西に振向ける立場にあった。その首都 Itil (Ātil) には、東ローマやアルメニアの商人、イスラム商人が集まって著しい賑わいを見せ、それとともにキリスト教、イスラム教、ユダヤ教が流布したといわれる(4)。

このように遅くとも10世紀には、ブルガール、イティル、ウルゲンチの三大国際商業センターを結ぶ連鎖が歴史上その姿を現わす。そしてこれこそ、中央ユーラシアにおける南北交渉の軸線にほかなるまい。

もっとも、10世紀の初めにアッパース朝カリフ、ムクタディルの命を受け、ブルガールの王のもとに使いした Ibn Fadlān はこのルートを用いていない。彼はバグダードを出立し、「フラサーン街道」をへてホラズム

のジュルジャーニーヤ(ウルゲンチ)市に至り、そこで準備を整えたのち、ほぼ直線的にステップを北上してブルガールへ向かっている。たしかに最短距離ではあるが、困難がつきまとう。高価な商品を運ぶ隊商は、危険を避けるために、よほどのことがない限り常道を行く。しかし、外交使節の場合は必ずしもそうではない。イブン・フアドラーンはその旅行記の一節で次のように述べている。「〔ブルガールの〕サカーリバ (Şaqāliba) 王には、ハザル人の王に支払うよう貢納が義務づけられている。それはかれ〔サカーリバ王〕の王国におけるすべての家(幕帳)から〔納められる〕の黒貂の皮である。ハザルの国からサカーリバの国へ船が到着すると、王は乗船し、船中にあるところのものを計算し、それらすべてから十分の一税を徴収する。ルーズ人(Rūs, ロシア人?) 又はそれ以外の残余の種類(の隷属民)が奴隷を携えて到着すると、王は十人につき一人を選びとる権利をもっている。」(5)

ブルガールはハザルに従属し、貢納の義務を負っていたことが分る。フアドラーンの一行が政治的ないし宗教的使命を帯びていた以上、東ローマとの関係もあり、ことさらハザルの領域を避けたのは、むしろ当然だろう。さらにこの記事は、ブルガールの商業国家としての性格とともに、ハザルとの交易がヴォルガの水運によったことを活写している。前記のイスタフリーの言葉と照らし合せて見るならば、やはりブルガール、イティール、ウルゲンチを連ねる道筋が、南北交渉の軸であったにちがいない。しかもそれは、イスラム貨幣、とくにサーマーン朝の貨幣がヴォルガ流域、ドンおよびドニエプルの上流域ではほとんど集中的に出土した事実とも符合する。

商品交換にともない、この軸線に沿ってイスラム文化が北方に流入した。10世紀の地理学者 Ibn Ḥawqal によれば、イティール市には三十のモスクがあったという。フアドラーンが到着したときに、ブルガールはすでにイスラム化していた。13世紀にモンゴルへの旅の途次、ヴォルガ河畔を通ったリュブリュキは、「一体どんな悪魔がマホメットの信仰をそこ〔大ブルガリア=ブルガール〕まで伝えたのだらう。」と驚嘆している(6)。

ホラズムがイスラム文化の北方への門口であったことはいうまでもない。そればかりでなく、南北の軸はインドに届いていたので、インド文化の強い刺激のもとに、独自のホラズム文化が開花した。アル・フワーリズミーやアル・ビルーニーなど、イスラム文化史上屈指の学者が輩出したの

は、それをよく示す。のちにハザールの地盤を引き継いだキプチャク汗国の文化の基調は、ホラズム文化であったといわれる(7)。

## 3

イスラム世界の形成にもなって歴史上その姿を現わした南北交渉の軸線は、それ以前に存在していたであろうか。これがつぎに問題となる。もとより、それを直接に指示する史料はない。ただし、早くも前5世紀に、黒海北岸から東方ないし東北方面に向かう交易路を紹介したヘロドトスの記事が目につく(8)。

この「スキタイ商路」は、あくまでも伝聞にすぎない。そこに連なる多くの民族の名を確実に今の地図上に指定するのは困難で、とかく論議的になっている(9)。しかしここでは、それを一々取上げる煩をさけ、Minns氏の意見に従っておく。すなわち、この商路は、ドン～ヴォルガ～カマの三流域を結ぶ線を北上したのち、ベルム付近でウラル山脈を越え、イルティシュ川に沿ってアルタイ山脈に向かったものと推察できよう(10)。なぜなら、考古学的調査の結果がそれを裏づけているからである。

まず第一に、スキタイ芸術の影響ないし受容は、東方においてはなほだ顕著であり、ことに南シベリアのミヌシンスクを中心として、その移植がはっきり認められる。この問題の解明および年代づけは多くの学者がこれを行ない、諸説も多い。しかし、黒海北岸からヴォルガ川とカマ川をへて、ミヌシンスク、アルタイ山地、北モンゴリアに及ぶ美術上の密接な関連は、ひとまず明瞭といえる(11)。「スキタイ商路」はこの経路と一致させることによって、はじめて歴史的現実になると思う。

第二に、ヴォルガ川とカマ川の合流点あたりからベルムにかけての地域で、ギリシア、ローマ、東ローマ、ササン朝、インドなどの器物が集中的に出土する(12)。そのなかには、獅子を狩るシャープール2世を描いた渡金銀製皿をはじめ、逸品も多い。これらは広範囲な交易関係を明示するとともに、「スキタイ商路」の重要な中継市場の存在を告げている。

それならば、この中継市場ではどんな商品が取引されていたのか。出土品はこれについて何も語ってくれない。しかし、ここは一つの手掛りがある。それは、のちにブルガールがこの地域に国をたて、毛皮類を輸出することで知られた事実にはかならない。黒貂その他の貴重な毛皮が、ブルガールからホラズムに送られたことを示すムカッターシーの記事にはすでに

ふれた。また、前記のフッドラーンによれば、ブルガールの王は租税として各戸から黒貂の皮を徴収していたという。しかも、この黒貂の毛皮がブルガールの産物でなかったことは、同じくフッドラーンが別の箇所で明言している。

「また彼らの国内（ブルガール）には、羊を買付けにトルコ国へ、あるいは黒貂と黒ぎつね「の皮革」をもたらすためにウィースー（wisu）と呼ばれる国に往来している多数の商人達がいる。」<sup>(13)</sup>

黒貂の毛皮が外来品であり、ブルガールの国内でさえ貨幣的な価値をもっていたことが分る。しかし、「ウィースーと呼ばれる国」については判然としない。これに関して、イブン・パットゥータの名高い旅行記の一篇が参考になろう。彼はブルガールの町から四十日の行程にある「闇の土地」で貴重な毛皮類の買出しが行われていることを報告して、「旅行者たちは、四十日の行程を終えたと闇の国に入る。彼らの一人一人は、そこまで運んできた貨物をそこに残して、いつもの基地に帰る。翌日に〔前日の地点に〕引きかえて彼らの貨物を求めると、その反対側に貂皮や青鼯皮や白鼯皮が置いてあるの見出だす。もし商人がその交換に満足ならば、それらを取めるが、もしそうでなかったならば、そのままにしておく。住民たちはもっと毛皮を増し加えるが、しかし、時には彼らの毛皮を引きこめてしまって、商人のもっていったものを残しておくこともある。これが彼らの商取引の方法である。」と語っている<sup>(14)</sup>。

まさしく沈黙貿易である。おまけにその土地が「闇の国」であることは、たとえそれが現実にはシベリアのある地点を指すにせよ、毛皮の産地が商人たちによって極力秘められていたことをほのめかす。ともかく、「スキタイ商路」はシベリアの毛皮産地と連絡するものであり、「毛皮ルート」と評してよからう。

すでに見たように、イスラム時代における南北交渉の軸線の一半は、ヴォルガの河流に求められる。「スキタイ商路」を「毛皮ルート」と解するならば、その起源は実に古い。しかし、ホラズムに通ずるもう一半はどうか。たしかに、カマ川流域でクシャン朝最初の皇帝 Kujla Kadphises の貨幣が出土し、またペルム地方の Bartym で発見された銀盆が、ホラズムの Tok-Kala 遺跡の出土品と密接な関連があるとしても<sup>(15)</sup>、それだけでは何ともいえない。

「スキタイ商路」が黒海岸に達する最大の交通線であったがために、へ



ロドトスの関心は専らこれに引きつけられていた。それだけに、ヴォルガ河口部からアラル海にかけての地域は、まったく知識の空白地帯とあってよい。後代のストラボンやプリニウスの場合も同断である。なるほどストラボンはカスピ海西北岸を占めていた Aorsi に言及して、「彼らはラクダによってインドやバビロニアの商品を輸入することができた。」と語っている<sup>(16)</sup>。しかし、「アルメニア人とメディア人からそれを受取る」と付言しているように、この記事はカフカズを越える南北交渉の存在を伝えてくれるものの、今のところ直接の関係はない。これとは別にストラボンの地理書には、中央アジアから黒海岸に達する貿易路が挙げられている。

「Aristbulos は彼がアジアで見た川のうち、インドのそれを除くと、Oxos 川（アム・ダリヤ）が最も大きいと言明している。さらに彼はオクソス川が航行可能であること、そして大量のインドの商品が川を下だつて Hyrcania 海（カスピ海）にもたらされ、そこから海上をアルバニアまで輸送されたのち、Cyros 川（クラ川）によって相次ぐ地域をへて、Euxenios（黒海）まで運ばれることを述べている。」とあるのがそれ<sup>(17)</sup>。

同じくプリニウスもこの商路に注目して、「インドの商品は Bactrus 川（アム・ダリヤの支流）からカスピ海を横切つて Cyrus 川へ運ばれることができ、それから陸路を五日ほど輸送すれば、Pontus（黒海）の Phasis に到達できる。」と記す<sup>(18)</sup>。

このルートを通じて実際に貿易が営まれたとは考え難い。ストラボンはカスピ海に関する Patrocles の探検報告に基づくアリストプロスの言葉をただ忠実に引用しているにとどまる。プリニウスもまた可能性を述べているにすぎない。船でカスピ海を横断していたとすると、オクソス河口なり、キュロス河口なりに海港が存在したはずなのに、それが全く知られていない。ポントス生れの地理学者として、黒海周辺の事情とくに詳しいストラボンが、このルートの終点にあたるコルキスやファシスの記事の中で、これについて一切ふれていないのも不可解である<sup>(19)</sup>。

Kiessling 氏が指摘しているように、パトロクレスがカスピ海探検のさいに、アトレク川の河口をオクソスの河口と見誤つたと仮定するならば、当時オクソスがカスピ海に注いでいたという根拠もなくなってしまう<sup>(20)</sup>。

ヘロドトスをはじめ、ストラボンやプリニウスははみなアラル海を知らなかった。それゆえ、ストラボンが Jaxartes 川（シル・ダリヤ）もオクソス川と「同じ海に注ぐ」と述べているのは、先ほどの記事と矛盾しな

い<sup>(21)</sup>。つまり「同じ海」とはカスピ海を指す。ストラボンやプリニウスの書に反映されていないとすると、パトロクレスもまたアラル海の存在を知らなかったはずで、オクソス川がカスピ海に流れ込むという先入観に惑わされて、アトレク河口をオクソス河口と錯覚することは十分に起りうる。

いずれにせよ、黒海を通じて得られた情報とイランをへて伝えられた知識が互いにふれ合わぬまま、ヴォルガ河口部からアラル海付近にいたるまでの地域は、ギリシア人やローマ人にとって「未知の土地」であった。たしかに、プトレマイオスの書にはこの空白を埋めようと苦心した形跡がある。とりわけヴォルガ川とカマ川についてのプトレマイオスの記載は、明らかに実地踏査者の報告に基づき、カスピ海を北洋の湾と見なしていたストラボンやプリニウスの知識から大きく前進している。

けれども、ヴォルガとカマの一線は前述の「毛皮ルート」にほかならない。それに沿ってもたらされた情報は、たとえ新しいものであるにせよ、知識の系統ではヘロドトスの場合と同じである。したがって、このルートからはずれた地域については、どれほど正確な報告に接していたかは疑問であろう。Daix としてウラル川にはじめて光をあてているのは注目すべきだが、それ以外の情報はやはりイラン方面から得ていたようだ。しかも、その情報がたいして新しいものではなかったらしい。ヤクサルテス川とオクソス川は、相変わらずカスピ海に注ぐことになっており、アラル海も知られていない<sup>(22)</sup>。彼の“Scythia intra Imaum”の地図が、一見精緻であるにもかかわらず、具体性に欠けているのはこの理由による。結局、このようなギリシア・ローマ史料の間隙を補うるものがあるとすれば、それは中国史料をおいてほかにあるまい。

#### 4

前2世紀の後半に、中国人がこの方面の情勢をはじめて知ったことは改めて説くまでもないが、その知識を中国にもたらした張騫の報告の中に、

「奄蔡は康居の西北二千里ばかりに在り。行国なり。康居と大いに俗を同じくす。控弦の者は十餘萬あり。大澤の涯しなきに臨む。蓋し乃ち北海なりという。」とある<sup>(23)</sup>。

この奄蔡がストラボンの伝える Aorsi の対音とされてからすでに久しい<sup>(24)</sup>。また康居はしばしばソグディアナに比定されてきた。これに対し

て白鳥庫吉氏は、まず康居をソグディアナと見る説が、康居と康国とを混同している中国史書を無批判に受入れた泰西学者の謬見であると断じ、康居は今のタシケント付近からシル・ダリヤ下流域にかけて存在したトルコ系の遊牧国であり、また奄蔡はシル・ダリヤ河口部からアラル海の北にかけて活動する同じくトルコ系遊牧民の国で、その名は Kipchak の対音であると解釈された<sup>(25)</sup>。

たしかに、奄蔡を Aorsi の対音とすることには、いくつかの難点がある。多くの学者の努力にもかかわらず、いまだに納得のゆく結論はでていない。しかしながら、ストラボンの Aorsi は黒海を通じて得られた情報であり、他方、奄蔡は張騫が中央アジアで耳にした知識である。その点を考慮すれば、両者の間にズレが生じたのも、むしろ当然だろう。

つぎに、張騫が奄蔡の存在を知ったとき、つまり前128年ごろに、Aorsi がストラボンの伝えるような地域を占めていたという証拠はない。ギリシア人が Aorsi の情報にはじめて接した年代は明確でなく、ほぼ前100年ごろであると推測されるにすぎないからである<sup>(26)</sup>。奄蔡=Aorsi とし、すでにカフカズ地方からカスピ海北岸にかけて活動していたとすると、康居からの距離が遠すぎよう。張騫の報告には、「康居は大宛の西北二千里ばかりに在り。」と見え、この里数は康居～奄蔡間のそれと同じである。むしろ正確な距離を示したものではないが、方位とともに一応の目安にはなろう。大宛 (Ferghana) からみれば、康居の位置はまさしく白鳥氏のいわれる通りなので、奄蔡も必然的にシル・ダリヤの下流域からアラル海の北に配されることになる。

しかしそうきめつける前に、ソグディアナの在り方を一考しておく必要がある。『史記』大宛伝には、ソグディアナに比定すべき地名はなく、つぎの一文によってその所属を推し測るほかはない。

「大月氏は大宛の西二、三千里ばかりに在り。媯水の北に居す。其の南に大夏、西は安息、北は康居なり。」

つまり、媯水 (アム・ダリヤ) とタシケントの間のどこかで、康居と大月氏の勢力が接していたことになる。白鳥氏が指摘されているように<sup>(27)</sup>、もし大月氏のなわばりがソグディアナをすっかり包み込んでいたとすると、なぜ張騫がわざわざ康居人の手をかりて大月氏に赴かねばならなかったのか、理解に苦しむ。そのころ、康居の力はソグディアナにも深く及び、少なくともタシケントとサマルカンドを結ぶ一線を握っていたのでは

ないだろうか。

さらにこれから推して、張騫が康居から大月氏に赴く途中で奄蔡の名を耳にしたということも十分ありうる。もしそうならば、奄蔡の方位はソグディアナの西北二千里すなわちアム・ダリヤの下流域に求めねばならない。同時に、「北に奄蔡有り。黎軒、條枝は安息の西数千里に在り、西海に臨む。」という安息国 (Parthia) に関する記事<sup>(28)</sup>も、すなおに解くことができる。

奄蔡の臨む「大澤」＝「北海」は、通常カスピ海に比定されている。しかし、奄蔡の位置をアム・ダリヤ下流域に求めると、それはアラル海を指す。康居から大月氏に旅した張騫がアラル海について無関心であったとは考え難い。アラル海を知らぬまま、カスピ海だけを聞き知ったと見るのは、かえって不自然であろう。私としては『史記』の所伝を、Aorsi (奄蔡) の西進を示す中間報告と解釈したい。

奄蔡についての『前漢書』の記事は『史記』とほぼ同文である。また『後漢書』は南朝宋の范曄の撰。そこで後3世紀半ばの史料によると、この方面に奄蔡のほか、阿蘭、柳国、巖国の名が見える。すなわち、『魏略』の中に、

「また柳国有り、また巖国有り、また奄蔡国有り、一名は阿蘭。みな康居と同俗なり。西は大秦と東南は康居と接す。其国には名紹多し。畜牧して水草を逐う。大澤に臨む。故時には康居に羈属するも、今は属せざるなり。」と記されている<sup>(29)</sup>。

ここにいう阿蘭は明らかに Alan (Alani) である。Alan は後1世紀の半ば、北方からカフカズ山脈を越えてイベリアに侵入した民族として記録されて以来<sup>(30)</sup>、しばしば西方史料に現われる。ストラボンの伝える Aorsi とほぼ同じ地域を占め、民族系統も関係が深い<sup>(31)</sup>。

白鳥氏によれば、奄蔡を一名阿蘭としてあるのは、ストラボンの書に見える Alanorsi、つまり Alan と Aorsi を混一したのと同様の誤りであり、これを別々な国と解すべきだという。そして Alan はカフカズ北部からカスピ海北岸にかけて活動するイラン種の遊牧民。柳国はヴォルガ中流域に居たフィン種の住民で、その名はモルドヴィン語でヴォルガ川を呼ぶ Rha, Rhau, Raw を訳したもの。また巖国はカマ流域のフィン種の民で、その名は Kama という川の名が訛ったものであるといわれる<sup>(32)</sup>。

ただし、ストラボンの書には Alanorsi という民族名はない。この名は

プトレマイオスの地理書に見えるもの。しかもプトレマイオスはこれを未知の土地に接壤する位置に配し、別にカスピ海の北に Aorsi を挙げている<sup>(33)</sup>。

前述のように、プトレマイオスのこの方面に関する記載は、「スキタイ商路」についての新情報と従来知識とを総合したものである。その場合、Alanorsi は情報提供者が恐らくヴォルガ河口部で見聞した新知識に属する。ところが、プトレマイオスはカスピ海の北に Aorsi が居ることをすでに知っていた。そこで、Aorsi と Alanorsi とを別個の民族と見なし、後者の居地をずっと東北の未知の土地に接する地域に当てることによって、この矛盾の解決をはかったものと察せられる。

換言すれば、Alanorsi という名は Alan と Aorsi をあながち混同したのではなく、両者の連合体を指す呼称にはかならず、当時カスピ海の北に居たのは、Aorsi ではなくて Alanorsi であったということになる。したがって、『魏略』に「奄蔡国一名阿蘭」とあるのは、その事情を正しく伝えたものとして文字通り受取ってよからう。また『史記』の奄蔡と『魏略』の奄蔡（阿蘭）とではその拠地を異にするが、『魏略』の「故時には康居に羈属せるも、今は属せざるなり」という記事はこの移動を反映したものと解釈される。しかるに、白鳥氏は奄蔡と阿蘭を別々の国とする見解を前提として、東西の交通路を考えられた。すなわち、当時アラル海の北岸から黒海の方面に行く商路は、カスピ海の北岸を通らずに、アラル海から西北に向かい、オレンブルグあたりをへてカマ川流域にいたり、この川からヴォルガ川の流域へ、ついでドン川に沿って黒海岸に達したと説かれている<sup>(34)</sup>。前章で「スキタイ商路」として捉えたのは、ドン、ヴォルガ、カマの三流域を連ねてアルタイ山に向かうが、白鳥氏はアラル海の北岸とカマ流域の間に交通路を想定し、これをカマ川流域で「スキタイ商路」と結びつけられたわけである。

これに反して、『魏略』の記事をそのまま受取るならば、奄蔡＝阿蘭であり、この国が西は大秦（ローマ）と東南は康居と接していたから、中国人は奄蔡（阿蘭）を通じて柳国、さらに跋国の存在を知ったと考えられる。そのうえ、『魏略』の誌すところでは、「其国には名貂多し」とある。その書き方から案じて、これは明らかかに一国に関するものであり、奄蔡を指す。つまり中国人はカマ川からヴォルガ川をつたう「毛皮ルート」をヴォルガ河口部を通じて聞き知ったとすべきであろう。

ここで、5世紀前半に成った『後漢書』の所伝を参考すれば、つぎの一文が目にとまる。

「嚴国は奄蔡の北に在り。康居に属す。鼠皮を出し、以て之を輸す。奄蔡国は改めて阿蘭と名づく。聊国は地城(?)に居り、康居に属す。土気は温和にして楨松・白草多し。民俗衣服は康居と同じなり。」<sup>(35)</sup>

もっとも、原文には「奄蔡国改名阿蘭聊国居地城……」とあるので、一続きに阿蘭聊国と読み、奄蔡の改名とすることもできよう。しかし、『魏略』には阿蘭とあって阿蘭国とは書いてないし、別に柳国が紹介されているから、阿蘭と聊国(柳国)は別けて読むべきである。そうすると、奄蔡国についての説明は「改名阿蘭」の四文字だけで、しかも旧聞に属する。恐らく『後漢書』の撰者が阿蘭(奄蔡)を取上げたときには、阿蘭はヴォルガ河口部を占めておらず、ために新情報が得られなかったのではないか。

これに関して、7世紀の前半に撰述された『隋書』を参照してみよう。北狄伝の一節につきのように見える。

「拂林(Frum)の東には、則ち恩屈(Ugur)、阿蘭(Alan)、北褥九離(Baskir)、伏唄昏(Bulgar)等あり。」

( )内は白鳥氏の解釈による。しかし、これだけでは阿蘭(Alan)の位置は補足できない。そこで時代は少し遡るものの、6世紀の半ばに東ローマの将軍 Zemarchos が皇帝ユスティノスの命を受け、天山山脈の北麓に拠っていた西突厥の王庭へ使いたした事実が想起される。これを伝える東ローマの歴史家 Menandros の書によれば、ゼマルコスとはトルコからの帰途、

「Ich(エンバ川)を通過して Daich(ウラル川)へ、そこから Attila(ヴォルガ川)へ通じる広い沼地を通り、Ougouroi に至った。……〔それから〕彼らは Alania(アランの土地)に着いた。」<sup>(33)</sup>

これから推して、そのころは Ougouroi がヴォルガ河口部を占め、Alan はカフカズの北麓に本拠を移していたようだ。6世紀にコンスタンティノポリスで筆をとったゴートの史家 Jordanes が「Hunuguri 族は貂の皮を輸出することでローマ人に知られた」と述べているのも興味深い<sup>(39)</sup>。Hunuguri 族は Ougouroi, Ugur(恩屈)と同一で、のちにハンガリー建国の祖となった Magyar にほかならない。ヨルダネスの記事は、6世紀ごろにこの民族が「毛皮ルート」の要衝ヴォルガ河口部に拠っていたことを示す傍証となろう。

阿蘭 (Alan) が本拠を移したのはそれよりも古く、4世紀後半のフン族の西進によるものだろう。フン族の圧迫・征服を被り、Alanの一部はゲルマンのゴート族やヴァンダル族とともに西に進み、北アフリカのヴァンダル王国の建設にも一役買っている<sup>(40)</sup>。カフカズ地方に退避した一部はその後永らくこの地にとどまり、As, Asi, Yasi, Yasyなどの別称で知られた<sup>(41)</sup>。

『後漢書』の記事はこのような阿蘭 (Alan) の動静を反映しているようだ。つまり、ヴォルガ河口部を占め、北からこの川筋を下たる毛皮の中継貿易に従事していた阿蘭が移動したので、康居は一時的にせよ聊国や罽国と直接交渉に入り、その成行きとして聊国と罽国の事情を従前よりも詳しく知ることになったのだろう。「出鼠皮以輸之」の一句は阿蘭の毛皮が罽国から輸出されるのに気づいたことを示す。「聊国居地城」とある不可解な一句も、「北域に居り」と改めて読むことができはしないか。

『後漢書』の聊国と罽国についての知識の源は康居であったにちがいない。それでこそ両国が康居に属したという大袈裟な表現もはじめて理解できる。康居のなわばりがアム・ダリヤ下流域 (ホラズム) をも含めていたにせよ、聊国や罽国を従属させていたとは思えない。康居と両国との間に密接な交通関係があったという軽い意味にとっておくべきだろう。阿蘭を基準にした方位から見て、やはりその交通路はホラズムからアラル・カスピ両海の間を抜け、ヴォルガ河口部で「毛皮ルート」に接続するものであったと推測される。

このような交通路が早くから存在したことをほのめかず話が残っている。すなわち、アレクサンダーの遠征に関してアリアノスの伝えるところによれば、

「Chorasmii の王 Pharasmanes もまた 1500 騎をともなってアレクサンダーのもとに参じた。ファラスマネスは、自分の住んでいるところが、Colchis 族と Amazones という女人国とに接しているといい、もしアレクサンダーがコルキスとアマゾネスの国土に侵入し、黒海の近くに住んでいるこの方面のすべての種族を征服する意志があるならば、案内をつとめ、また遠征軍のために必要なすべての品々を用意しよう」と約束した。」とある<sup>(42)</sup>。

そのころ Chorasmii の勢力が黒海付近にまで及んでいたとは、とうてい信じ難い。それにしてもこの話は、Chorasmii がホラズムの地を占め

ていたことを示すとともに、そこからカスピ海の北岸をへて黒海に至る交通路が知られていたことをうかがわせるに足る。

クバン地域（アゾフ海東岸）とタマン半島から、バクトリア様式による宝玉細工および金属細工の美しい器物がいくつも出土しているのは、バクトリアと黒海北岸との活発な交渉を裏づけている<sup>(43)</sup>。先に述べたパトロクレスのカスピ海探検を動機づけたのも、アム・ダリヤによってインドやバクトリアの商品が運ばれている実状であったにちがいない。それがいつしかパトロクレスの探検報告と重なり合って、アム・ダリアからカスピ海を横断して黒海に達する貿易路が、あたかも実在するかのような記事にすり変わってしまったのだろう。アム・ダリヤを下だるインドやバクトリアの商品は、ホラズムをへてヴォルガ河口部に転送され、それから黒海方面へ分岐するとともに、ヴォルガ川を北上してカマ流域に達していたと考えた方がよさそうである。とくにカマ流域で出土したクシャン朝やササン朝のおびたしい器物は、この経路に注目してはじめて理解できるのではないか。これはまた、のちにブルガールを取入れ口とするシベリア産の毛皮が、ヴォルガ河口部のハザール国をへて、ホラズムに輸出され、ついでそこからイスラム世界の中心イラクに送られていた事実とも符合する<sup>(44)</sup>。

## 5

『魏略』が奄蔡（阿蘭）に「名貂多し」と伝えた記事は、ことのほか重要な意味をもつ。それというのも、この簡略な一言に、奄蔡（阿蘭）の立場がみごとに集約されているからである。つまり、奄蔡（阿蘭）=Aorsi(Alan)は、ヴォルガを下る「毛皮ルート」の要衝を占め、一方はホラズムを通じてソグディアナやバクトリア方面へ、他方は黒海岸やアルメニア方面へシベリア産の毛皮を中継していたことを物語る。前述のクシャン朝やササン朝の器物とともに、カマ川流域で発見された各種のギリシアやローマの器物も、やはり毛皮と交換されて Aorsi (Alan) の手に渡り、さらにヴォルガ川を遡って送られていたにちがいない。そこに、この国（部族連合組織）の発展の原動力が求められるし、また東西双方から注目された理由が見出せよう。その後もつぎつぎに西進する遊牧民がこの地盤を引きついで栄えた。ハザール国とキプチャク汗国はその代表にほかならない。

シベリア産の毛皮は、中国産と絹布とならぶ重要な国際商品の一つであった。北方遊牧民の中継をへて中国に入った毛皮が、対外貿易の具として



再輸出される場合もあったらしい。プリニウスが、「あらゆる種類の鉄の中でセレスのそれ (Seric) が最も秀れており、彼ら (Seres) はこれを織物および毛皮とともに送る。」と述べているのはその一例<sup>(45)</sup>。『エリュトッラー海案内記』にも、「セレスの毛皮」がインダス河口の Barbaricon 港から地中海方面に輸出されたことが見える<sup>(46)</sup>。

しかし、この「セレスの毛皮」が中国から再輸出されたものであると、ただちに断定できない。中央アジア経由で絹布とともに運ばれてくる毛皮をセレスのものと錯覚したままで、実際にはそれが Aorsi (Alan) の手をへて中央アジアに送り込まれた毛皮であったかも知れないからである。Seres, Serica をめぐっては、内外の学者が論議をかさねてきたが、もともとそれが厳密に中国を指した言葉でなかったのは確かである<sup>(47)</sup>。アムミアヌス・マルケリヌスがアラン族について「ガンジス川に及ぶアジア各地にその勢力を張っている。」と述べているところからも<sup>(48)</sup>、「セレスの毛皮」が実は「アランの毛皮」ではなかったかという疑いが深まる。

いずれにせよ、パクトリアで分岐してインドおよびイラン南部に向かうオアシス・ルート的一端は、インダス河口に届いていた。そこでマリノ・ルートと連絡する。パクトリアからアム・ダリアの流れを北に向かう一枝はホラズムに達し、そこでこれまで論じてきた南北交渉線と結び合う。ここに、東西の軸線と交叉しつつ、ユーラシアの南北を貫く一つの軸線が浮かびあがる。ホラズムはこの軸線の南半と北半の結節点として大きな立場を占めたわけである。

しかし、問題はそれだけではあるまい。ホラズムの立場とそれを通ずる軸線的作用はステップ・ルートの在り方と深く関わっているからである。オアシスづたいの道と異なり、ステップ・ルートを地図上に表示するのはむずかしい。もともと道なき荒野である。わずかに遊牧民の活動が足跡をとどめるにすぎず、しかもそれが必ずしも一定していない。そこで通常は旅行者の報告に基づき、ひとまずステップ・ルートを描き出している。西から見ると、黒海、カスピ海、アラル海の北を通して天山山脈の北麓に引かれた一線がそれ。前述の通りこの交通線はゼマルコスの遣使行によって歴史上その姿を現わした。しかし、それをただちに通商路と受け取ってよいであらうか。ホラズムの立場に着目するとき、少なくともアラル海の北を抜ける通商路は存在しなかったのではないかという疑いをもつ。

アラル海からバルハシ湖にかけてのステップは飢餓草原と評されるほどに

苛酷な環境を呈する。むろんオアシスも育たず、国際市場や隊商の基地としてふさわしい場所も見当らない。遊牧国家興亡の歴史を通覧して、この地域に目立つほどの国が成立していないのも、そこに理由が求められよう。したがって、移動する遊牧民の通廊ではあるにせよ、隊商の往来には不適であったと察せられる。

かつてステップ・ルートを旅した人々の報告を見ても、このあたりの事情がはっきりつかめない。ゼマルコスの足跡にしても、ウラル川以西は明確だが、アラル海の北を抜けたのか、それとも南を通ったのか、という点については判断に苦しむ。プラノ・カルピニはモンゴルへの旅の途次、「Cangitae の国を去って Bisermin 人の国に入った。」という。ロックヒル氏は「Bisermin 人の国」をホラズムに比定しているが、異説も多い(49)。

ギョーム・リュブリュキがアラル海の北を通過したことだけは確かのようにだ。マルコ・ポーロの父ニコロはヴォルガ流域からブハラへ、またイブン・パットゥータはキプチャク汗国の首都サライからフワーリズム(ウルゲンチ市)へ旅をしている(50)。どうやらステップ・ルートは、ヴォルガ河口部からカスピ海東北岸をめぐるホラズムに達し、そこでオアシス・ルートと握手するとともに、さらにゾグディアナやフェルガナをへて東北へのびていたらしい。つまり、不毛のキルギス・ステップを南を大きく迂回し、西トルキスタンでオアシス・ルートとからみ合っていたことになる。しかし、それをきちんと論証するためには、古く東北へのルート上に位置したと考えられる大宛や烏孫の在り方、またその地盤を引きついで国々の動向にも目を配らねばならない。今はその余裕がないので、いずれ稿を改めて論じたいと思う。

#### 注

- (1) W. Barthold : *Turkestan down to the Mongol Invasion*, London 1958, p. 235
- (2) A. Mongait : *Archaeology in the U. S. S. R.* Moskva 1959, p. 338
- (3) W. Barthold : *op. cit.*, pp. 237~238
- (4) J. Marquart : *Osteuropäische und Ostasiatische Streifzüge*, Hildesheim 1961, ss. 5~27
- (5) Ibn Fadlān : *Risāla*, 35, 5~9. 佐藤圭四郎氏の訳による。『遊牧社会史探求』第11冊, 9~10 頁

- (6) W. W. Rockhill : The journey of William Ruburuck, London 1900, p. 122
- (7) ヤクボフスキー, グレコフ共著, 播磨橋吉訳, 『金帳汗国史』, 147~149 頁
- (8) Herodotos, iv. 21~25.
- (9) J. O. Thomson : History of Ancient Geography, Cambridge 1948, pp. 60~64
- (10) E. H. Minns : Scythians and Greeks, Cambridge 1913, pp. 104~111
- (11) R. Grousset : L'Empire des steppes, Paris 1939, pp. 624~627
- (12) A. Mongait : op.cit., p. 143, p. 338~339
- (13) 家島彦一氏の訳による。『イブン・フアドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記』, 49頁
- (14) H. A. R. Gibb : Ibn Battūta, Trabels in Asia and Africa, London 1929, pp. 150~151
- (15) G. Furmkin : Archaeology in Soviet Central Asia, Leiden 1970, p. 102
- (16) Strabon, xi. 506
- (17) Strabon, xi. 509
- (18) Plinius, vi.52
- (19) Strabon, i. 45, xi. 498
- (20) キースリング氏の仮説は, W. W. Tarn : The Greeks in Bactria and India, Cambridge 1966, p. 489 に取上げられている。
- (21) Strabon, xi. 518
- (22) J. O. Thomson : op. cit. p. 293
- (23) 『史記』, 大宛列伝
- (24) F. Hirth : China and the Roman Orient, Shnghai 1885, p. 139
- (25) 白鳥庫吉, 康居考, 『西域史研究』上冊, 71~120 頁。同。拂菻問題の新解釈, 『西域史研究』下冊, 631~642 頁
- (26) Strabon, vii. 306, xi. 506
- (27) 白鳥庫吉, 康居考, 『西域史研究』上冊, 107~111 頁
- (28) 『史記』, 大宛列伝
- (29) 『魏志』, 東夷伝に引用されている『魏略』
- (30) Josephus : de be bello Judaico, vii. 244
- (31) 拙稿, アラン族の西進, 『イスラム世界10』, 35~41 頁
- (32) 白鳥庫吉, 拂菻問題の新解釈, 『西域史研究』下冊, 645~649 頁
- (33) J. O. Thomson : op. cit., p. 239
- (34) 白鳥庫吉, 拂菻問題の新解釈, 『西域史研究』下冊, 645~649 頁
- (35) 『後漢書』, 西域伝
- (36) E. Bretschneider : Mediaval Reserches, London 1910, vol. II, p. 87
- (37) 白鳥庫吉, 拂菻問題の新解釈, 『西域史研究』下冊, 646~660 頁

- (38) K. Dieterich : *Byzantinische Quellen zur Länder-und Völkerkunde*, Leipzig 1912, s. 20
- (39) Jordanes, v. 37.
- (40) 「ヴァンダルおよびアランの王」という称号がそれを端的に示す。  
Procopius : *de bello Vandalico*, i. 24. 3
- (41) Hudūd al-‘Ālam, translated and explained by V. Minorsky, London 1970, pp. 444~450. J. Marquart : *op. cit.*, ss. 164~172
- (42) Arrianos, iv. 55
- (43) M. I. Rostovtzeff : *Social and Economic History of the Hellenistic World*, Oxford 1953, p. 456
- (44) R. S. Ropez and I. W. Raymond : *Medieval Trade in the Mediterranean World*, Columbia Univ. press 1955, p. 28にあげる al-Jāhizの記事。
- (45) Plinius, xxxiv. 145
- (46) *Preiplus Maris Erythraei*, ii. 39. 村川堅太郎訳, 『エリュトラー海案内記』, 106 頁による。
- (47) H. Yule and H. Cordier : *Cathay and Way Thither*, 東亜史研究会訳編, 『東西交渉史』, 30~45 頁
- (48) Ammianus Marcelinus, xxxi. 2. 16.
- (49) W. W. Rockhill : *op. cit.*, pp. 13~14
- (50) 愛宕松男訳注, 『東方見聞録』, 7 頁。Ibn Battūta, *op. cit.*, p. 167